

2017年2月6日掲載

親知らず

発見したら早期受診を

「親知らず」は大臼歯の3番目の歯で、12歳臼歯の奥に萌出（ほうしゅつ）してきます。萌出時期が高校生ぐらいからで、親が生え始めを知る機会が少なくなっていることから、名付けられたとも言われています。

現代人の場合、食生活の変化によって顎が小さくなり、生えるスペースがなく親知らずが生えてこない場合も多くなっています。正常に生えてきた場合には、大きな問題は起こりにくいのですが、正常に生えてこないとさまざまな弊害を引き起こします。親知らずが感染を起こすばかりでなく、隣の歯がむし歯や歯槽膿漏（のうろう）になったり、さらには隣の歯の吸収を起こしたり、歯並びも悪くなったりします。

こういった弊害を多く持つ親知らずを抜くか否かについては様々な考え方があり、一般的には、一度でも炎症を起こすと繰り返す確率が高くなるので抜歯が推奨されます。炎症の既往がない場合の抜歯については賛否両論ありますが、高齢になってさまざまな基礎疾患を有するようになった時点で炎症を起こしてしまうと、感染に伴うリスクが高くなります。高齢者の場合は、歯と骨が癒着していることが多く、普通の親知らずでさえ抜歯するのが難しいにもかかわらず、さらに難易度が増してしまいますので、若いうちに抜歯しておくのも一考かもしれません。

状況によって異なりますが、親知らずがあると分かった場合には、一度歯科医院を受診し相談してみると良いでしょう。